英語の再音節化とＬ２音韻論における流暢さとの関係について
―閉音節構造と開音節構造の構造と機能の相異から―

西原哲雄（宮城教育大学）Adrian Leis （宮城教育大学）

本発表では、英語の音節構造における再音節化という現象と、英語の学習者におけるＬ２音韻論との関係について英語とＬ２の音節構造の違いという観点から検討を行う。(1) に見られるように、一般に、２つの英語の単語の連続において、最初の単語の尾子音が、後続する単語が母音で始まるときにその頭子音に移動する再音節化という現象が頻繁に見られる。

(1) fee[l] (dark “l”) / feel it → fee [l]-it (clear “l”)

この現象では、単独では生起する尾子音の l が、暗い l であるが、it が後続すると先行する尾子音の l が、後続する it の頭子音に移動する為に、明るい l に変化するという事実は再音節化によって説明されている。Fried et al. (2010) は一般に、頭子音は強化される一方、尾子音は弱化されやすいと指摘しており（頭子音の中和はないが、尾子音は中和や声門閉鎖音化される）、この再音節化の現象もこの指摘にしたがったものであると言える。また Baldwin (1995) では、このような再音節化の現象を子音獲得 (consonant capture)と呼び、また Kormos (2010) は子音誘引 (consonant attraction) と呼んでいる((2) を参照)。

(2) CVCVC(C) # VCV → CVCV# C(C)VCV. cf. set out → se t-out (Baldwin 1995)

Kormos (2010) では、この子音誘引 (consonant attraction)の現象が英語のＬ２学習者の音韻論における習熟度に関わっており、子音誘引 (consonant attraction)が的確に英語発音において行う事ができる者ほど、Ｌ２音韻論の流暢さ(習熟度)が高いと指摘している。

Kormos (2010)の指摘は当然のことと考えることができるが、なぜ子音誘引 (consonant attraction)がＬ２音韻論の習熟度といかにして関わっているのかという理論的な説明は一切なされていない。

そこで､例えば日本人英語学習者などにおいてもこの現象はしばしば見られるものであるが、子音誘引 (consonant attraction)の生起は、英語の持つ特有の音節構造である閉音節構造というものが関わっており、基本的には開音節構造を持つ日本人英語学習者では、そのような現象が生起しにくいと考えられる｡すなわち､開音節構造を持つ日本人英語学習者は母語において、尾子音を持つことはほとんどないので、子音誘引 (consonant attraction)が本質的に生起することは少ないので、英語の音韻論に遭遇した時に、子音誘引 (consonant attraction)を行うことは非常に難しいと言える。

これらは、閉音節構造である英語と開音節構造である日本語の音節構造の本質的な違いに基づくものであり、基本的に母音で終わる日本語の場合には構造(モ―ラ)ですでに CV という普遍的に安定している音節構造を満たしており、これらの分節音は直接 m (mora) 接点から支配されて安定しているが、英語の閉音節では、尾子音で終わることが多く、特にこの尾子音はライム接点(Rime) を経由して σ (Syllable) 接点から間接的に支配されているために比較的に、σ (Syllable) 接点から直接に支配されている頭子音とは異なって、不安な為に子音誘引 (consonant attraction)を受けると考えられる。

したがって本発表では、日本人英語学習者などのＬ２音韻論における子音誘引 (consonant attraction)の働きに基づく流暢さ(習熟度)とは、日英語などの音節構造(開音節と閉音節) の相異に起因しているものであると指摘する。

参考文献

Baldwin, John (1995) “A ‘tenny’ Rate,”*Studies in General and English Phonetics: Essays in Honour of Professor J. D.O’Connor ,* ed. by Jack Windsor Lewis, 301-309, Routledge, London.

Fried, M. et al. (2010) *Variation and Change,* John Benjamins Publishing, Amsterdam.

Kormos, J. (2010) *Speech Production and Second Language Acquisition*, Routledge, London.